義仲勲功圖會

三

へ13
3380
3

へ13
3380
3
巻

義仲勲功図會前編巻之三

目録

駒王丸幼稚奇行
兼遠駒王丸の賢愚を試図
義仲恠力制奔牛 付図
巴女勇力
義仲主臣巴女ゞ勇力を見る図
義仲与頼朝誓約
義仲与実盛對面 并義大虎丸之事

大正十年八月廿九日寄贈
本大學圖書館藏

義犬悪女年を咬で恩ふ酬図

義仲母公死去　観心房相義仲

根井大弥太勇力の図

根井父子属義仲旗下

木曾義仲勲功圖會前編巻之三

駒王丸幼稚奇行條

浪速　山珪士信考訂

却説信州木曾の住人仲三権頭兼遠と実盛が頼ふ憑む義賢の遺孤駒王殿を預り撫育しまゐふ此兒天性媼順ふ〳〵如何なるかすゑ有ても啼こしかく性ゐるこなれど兼遠大ふに歎美し流石八幡殿の御末孫なる玉樹長新枝と唐人の賦せしもうなれ公達の吏ふこそ唐山江南の人八兒産まく二才ふなる頃弓箭刀鎗其外所有諸器を其子の前ふ陳ね兒の意ふ任せく見を探らせ其初〳〵手ふ挂る物ふ付智愚貪廉を勘考し其好む道を学び究ちむしゝぞ此若君をも支ふなしひく拭ひ乃と兵器楽器儒書兵書筆墨の類を〻ぐ〻衣鞠振鼓木偶巫車の類ふ至るまく廣間ふをゝぐ遥の此方ふ小技殿ふ劭王しめを抱き進らせく坐ふ著扱兼遠劭王殿ふむゝ彼処ふ並座を立し中ふ若ゞ御心ふ欲とみを物をしりぬへとやゝ乃ば僅ふ二才

乃駒王どの完示〳〵く母御前の膝を這下り突然としいざり行て並ぶ三ツる
緒品を見て〳〵ゐ小技どのそゝ乳母侍女ホハ木偶哉やとりゐ元車とや
とう見ゝと目も放さじとまもらるゝ駒王どのを頓て立寄て先兵書を
把く左小抱へ右乃手を指仲生羽の征箭一筋とつく再びいざり戻り母御乃
膝小這上りゐ乳母侍女共を覓〳〵惘呆て乃兼遠双手をさゝとあ実摘
擅ゝ二葉より馨〳〵とゝ麦く亟ゝる中小も小児乃好む所元景子木偶小も
目もくれずゝ兵書といふ箭といふ武士乃専ともする物を把ゐ賢〳〵さよ
天晴成人乃後ハ和漢小史ゆる大将軍小やなりゐとくと悦ぶこと限りなく
是より弥心を用ひく雑弓〳〵小技どのも未頼母〳〵ゐりゐ昼ハ諸士ゞ射
術剣法乃稽古ゝを駒王どのゝ小見せ夜ゝ兼遠ゞ子息若侍を集へく
聖経を説兵書を講ずる席小在て駒王殿小聴せ給る小女〳〵も倦退屈を
る気色なく昼夕論夜も講釈の終るまゝ眠ゐゞ乳を飲乳母を食

ずゝ残も忘まく跳へ歩へゐゝ又是を奇とせり斯て年月何〳〵と立て
駒王どの早七才小成ゐ小形貌大なるゐ十歳ばかりの童のごく些も飽まく
強く十才以上乃童も及し能ゞ只兼遠ゞ子乃兼若井四郎当年八才小〳〵
駒王どのと牛角の力量あり駒王どの心荒〳〵く一拳小〳〵犬を撃乃一脚小鹿
を殺しゐ而のゝ〳〵ゞ四書五経をもゞ兵書なんゞ残も暗小誦〳〵
で兼遠ばかり君いまゞ経典兵書を素績〳〵ゐ小何日の程小暗記〳〵ゐ
〳〵ゝ問駒王どの微哂て我母乳母が懐小抱れ三才の頃より夜毎小御身ゞ
講説を何〳〵暗記ゞ覚〳〵答へゐ兼遠舌を震〳〵く孩児減り君
ハ神童なり〳〵試小聖経乃篤矢を對論もるゐ駒王どの兼遠ゞ問程のゝを
答へ〳〵流水乃ごゝ一言半句も滞らゞ数年切磋乃輩といくゞもよくみゝぶ
こう能ゞ是〳〵より兼遠駒王どの小射術を教へ剣法を傳なゞもるゐ一を聞て
十を知睿智なれば幾許なゝゞ〳〵く緒技小熟〳〵太刀才早業緒人の目を

権頭弁遠
駒王丸ノ
智愚を
試ミ図

扨どうかと待なり。此外假初の游戯も陣を布隊を整へ車〻攻伐うとけば
をなしゝ。去程に日月に閑字なく。弱王ごの早十五才にもなりぬれば兼遠
烏帽子親となり元服させ進ぜれば母御前小枝ごの大いに悦ひ。父義賢
の一字と中三の中の字を象りて是より木曽冠者義仲と称す。北〻
都に平相國清盛朝權を擅にし。暴悪の事ども遠近ゆゝしも隱なれども一時
義仲兼遠に向ひ仰々の某母ごの物語に。父義賢大倉ごの谷に陣没し。我
も義平ごの為に失なべりしに。畠山重能齊藤実盛と申人ごの情あり。辛紀命を
助られ斯御辺ごの厚志を受撫育に預るより。因て我稚〻心も天晴人となり
ぬ。父の仇義平を討て家名を引起さんと。日月の立を待ゝに其甲斐なく。保元
に祖父為義もごとく族滅に遭ひ。引續て平治の役に義朝亡び仇敵義平も
虜となりて命を損じぬ。我宿望空しく中途に廢れさきぶ武道を捨
出家入道もとゞまれども。今平家世に跋扈して日本過半を領し暴逆を擅

にして源家は有しも無がごとし。然ば是平家を我家門の仇なり。某八幡殿の
末裔にて他に人々に忍びて蟠蜷立車の譬に似れども。何卒一度義旗を翻
し運に合ぶ奢る平家を斃して家名を興し。其上帝王を補佐し
下萬民の苛政を弛んとおもふに付。都鄙の地の利を案じ。世の動静を窺ひ
為に諸國を經歴して思へば兼平兼光両人も某と俱に啓行せんと仰
す兼遠は點首笑して宜り。某君を実盛が手より預りて日より天
晴名将に仕へあげ父祖の家名を引興させんと。昼夜心力を索せし甲斐
有て天性の智才勇敢百万騎の大将軍になるべし。機自然と顕れ。今
清盛を保元平治両度の軍功に募て其身させる德なくして太政大臣の極官
を汚し一族を高位高官に進め。帝王を蔑如し暴悪日々に增長せば久し
からず彼一門滅亡の秋當時平家を征せんの伊豆の佐殿頼朝君の
外に有ざるべし。松の内府重盛忠直仁智の賢人にて上を敬ひ下を

恤を清盛の暴悪も内府の徳に掩はれて天下の人心平家を背く心有べからず。此間に緒國の地の利を察し國々の剛億をも試み且々伊豆の佐々木も面會しく潛に大義の緒を示し合せ給へと。俱々に勸められて義仲大に悅喜あり。今井四郎兼平樋口次郎兼光と田舍武士の京内猪もるに躰扮裝兼遠に別を告て曾を立て先都へと上り給ひ

義仲怪力制奔牛條

斯て義仲公兼平以下に雜々信列を裳足し処々の地の利を尋ねつゝ陣場戰場の使を考へ悉く画圖に写し。忽ち旅の心安さハ茲なり。三日彼処に五日滯留し往々て加賀越中の竟に入る。前面に一座の大山有士人に其名を問に礪浪山なりと答へ。義仲主從頓て山中へ分登る。路嶮峻にして巖岩峙ち。老樹翁背て日影を掩へ白昼と雖も猶暗し。扨七曲九折の難路を行こと廿里。六十里ばかりに及ぶ。宿るべき人家もなく

を日已に西山に沈み星の影ばかりに遮れ路いよ〳〵暗くなり只れ暗穴道を躡が如くなれば物に動ずね義仲主從も十分飢に臨み足も疲れ殆と歩まるべし。傷の岩角に腰かけ暫時息を休め居るに忽ち山上より呼叫喚ぶ猛来る人音を。主從紛れて近付き見るに先に立る者ハ拒火を振照し。後に付く者を素手揮て喘ぎ〳〵走り下る。兼平彼に向ひ各々何すの有く斯遽しく逃惑ふ〳〵やと問に。一人の男大息吐ぎ曰。我々ハ此山下の者ゆへ今日山上の柴を刈おりゐ日を暮したるに一人の者牛に柴を負せ拒火を牛の角に結付。我々と斬りの〳〵下りるに彼拒火漸々ふり立て火屑や牛の頭に落かゝり忽ち渠吼り狂ひ負る柴を刎落し。先に立る男を角にかけく遥の谷へ投棄し。ぶの根岩角を躍り超る。其勢ひ烈〳〵結付し拒火の頭へ燈るに隨ひ倍荒く蒐りいぬ。迚きりぬと絡る内に早件の牛吼りかけく走きるに山賤ども須驚きさわぐ雲

霞ふ麓をさゝく逃行ゝり兼平兼光も牛の勢ひ猛烈なるふ恐ろしく主を引く傷へ避ゝふさんとも。義仲女〜も動ぎる色なく蒐来る牛猛闘とゝ〜。うゝ〜回るゞと乃る間もなく片手ふ尾筒を捻つゝ曳中と云く曳戻〜ゐ。さ〜ゝの荒牛金剛力ふ曳留られ吼ゆ〜ゝ三段ゝり曳戻されゝ大ふ怒り。身を搏〜ゝく義仲を角ふ掛んと起ゝる義仲早く身を躍〜く牛れ背（闘ゝと起ゝふ腰刀抜手も見せゞ拒大結付ゝる方乃角を横ふもゝと切捨ゐふ。太刀八希代乃名刀主も希代乃手練なれゞ。さ〜も堅剛乃牛角も行を切ゞ〜ふ切起ゝり此躰を見〜今井樋口も二番ふ蒐寄牛乃鼻緒ゝゝく曳居一すも働ゝず。今迫狂ふ〜牛も大力乃若者ふ曳ゝられ〜上。角ふ縋ゝふ拒大乃患を忘れ〜ゝゞ漸々ふ鎮ゝり〜ゝり兼平兄弟頓く傷乃樹の根ふ牛を繋ゞられゞ義仲ふ走ゝふ牛乃背ゝり飛下ゝく〜ゝの岩頭ふ腰ふ打ゝけゐ。今井樋口其外乃奴僕ゝゝく主の怪力早業を見ゝく感歎〜。緘ふ君の神武を能見下のゝゝゞゝ

なゝゞと舌を巻ゝゞ恐ゝ〜ゝ。義仲微笑〜ゐ。昔齊の田単即墨乃城ふ篭ゝ〜時燕軍多勢ゝく囲ゝ攻ゝゝと急なり〜ふ。田単謀を案〜ゝゞ〜城内乃牛千余頭を徳集め。牛乃身ふ五彩乃竜文を画ゝゝふ衣を着せ兵乃を其角ふ束ね。ゝふ油を洒ゝく牛の尾ふ結付其端ふ火をけ夜中一齊ふ燕軍乃陣へ放〜ゝけ。其後ふ軍勢を進めゝく夜討〜ゝるふ彼牛。尾乃燃ゝふ驚れ狂ひ燕乃陣ふ乗入三軍を突倒〜踏殺ゝ。敵軍大ふ恐ゝふ是を見ゝふ五彩の竜文火光ふ英〜ゝく何ゝも見ゝけ難く其猛威ふ辟易〜大崩ゝと成ゝく敗走〜ゝるゆ田単敵を討〜ゝ〜数ゝゝず終ふ燕の為ふ攻取れゝふ七十二城を奪反〜ゝふ〜史紀ふ載られゞ。其ゝ見ね唐土乃昔絡我ゝ国前ふ火牛乃勢ひの鋭を見ゞ〜ゝふ今宵ゝゝゞ其真ふ鋭を見ゝゝふ事も自然と縛畧乃助ふなふ〜ゝも有ふめと称り〜ゐ。緒人感称〜。君ふ男力のゝふあゝゞ智略もゝゝ田単ゞ下ふ出ゐゝゞと称ゝく其処を。其後ゝ山中の樵夫

義仲勇剛
奔牛を
制する図

う奄ふ宿を需く一夜を明　くらう

義仲与頼政對面條

斯く其日義仲主従八砺浪山を五く越中越前若狭路を経都ふ著し

く所くを見物くるに緘ふ平家の繁昌はまくふ勝り国を拝ぐらうと行

たり然るふ義仲八別腹の兄六條判官仲宗兵庫頭頼政が嫡子と成て在よ

兼くは芳くまくるに晴ふ頼政が邸宅ふ赴れ案内くに是を信列木曾な

ふ仲三推頭兼遠が手ふ嫡育せられ故帯刀先生義賢が遺孤駒王丸ゆく

い今の名八木曾冠者義仲と申せり今般洛中一見の為ふ忍く上りん若しく

ど八對面ふくるべくと従者をかつく言入さきれば折節頼政在宅くて是を

は一度八驚ぐく又一度八悦び客舎ふ請じく茶菓の饗應をかけ義仲を身を

思ふ同舎武士ふ扮装たれで自ら縁遜幼見恭の會釈あるゆゑ頼政其人品

を見るふ白面秀麗言語動止自ら各将の風を備へられた心中悦びふ不堪

扨もきれくるゆうの業まくと早十五年の昔弟賢叉帯刀先生八一時の短慮より

無名の軍を企姪義平の為ふ落命有しより都へ生えしくど我ふ緑ふ生ゆく

悲愁言ん方なくいまく御身八二才の年何年尋くるに凡仲宗と同く嫡育せられ

しく在所を尋ふ御身の所在を厳しく早行ふれど義平まく御身の所在を

殺害するとの弥心苦しく弁ひふ後ふ生ぐ人有く仲三兼遠ふ紙一育ある

よしの扨心安らくと女心安堵られども是彼公私の要用繁多ふ遠ら者一度の

音信をも通ぜざるふ其を恨くも思ぐと尋ふ嬉しくよ源家八保元平

治の役ふ断絶くたるふ其独世ふ有むさぐ御辺ふ心ゆも一門の義を捨平

家ふ阿諛ひ身を安んぜると思ふくれども露さら所存なくと平治の乱ふ

も始と内裏方ふ弛加り君を守護くまくれども君信頼が暴悪を悪くまひ

潜ふ六波羅八御幸せきせ申ふより一門の好八私ます君ふ弓弾なるべくて恐

多くれば我ふ君の龍駕を暴ひ六波羅方となれば是ふ依く清盛ふ同く

源家の類族なれども我一家耳を安穩ふさ置りされども我一門の泯滅と
他はんく虎狼の平家ふ隨ふと豈心ふ快らんや。何卒時節を見合せ
源家再興の緒を聞らさでやとおりふしと久しくとのぐ。平家の運ハ旭の昇ぐ〳〵
西夷ハ蛍ふ虎威ふ伏し靡ふね草木もあくされど我一家の勢をうつる事を
なしと遂ぐ兵ふあるぐ。只ハ時運の熟するを待ふハ不如と世人の嘲りをも省ず
徒ふ今日まぐ見合居ふり。其ハあまぐも盛なる者ハ衰へ奢れる者ハ
ふるぐ泯ハ人世の常なり。倩清盛が奢侵兇暴を見るふ已ふ一門亡滅の萌
を顯せり。源家再興の時節恐らくハ廿年の外ふ出ぐ。御身も八幡殿
の後胤義賢の二男なれど時それふ緣躰をくくひ時の熟するを待く君の御
大事ふ奉り合。又祖の家名を引興ハ一ふ去ぐ平家子孫の永久を紆
く。源家の枝葉も根を斷く葉を拔さんと。木ふも莖ふも心を置く構く我
こそ先生義賢が子よりんぐ自稱く世人ふ知れいふ。今日本ふ源氏の

類葉猶是彼在が中ふ。蛭が小島の頼朝ハ大將軍の機を備へられど平家の大患
ハ彼人ふ有ぐ。御身も頼朝と心を合し。今皆く身を潛め名を埋く采花
の春を待ふ永く都ふ徘徊く平家の間者ふ安出されぬど。禍ひ忽ち其身
ふ及ぶ至られて疾く本國へ下ふ。世を忍ぶ御身なれど是より音信を通せ
んも人の疑を生ずる恐あり。互ふ音信不通なるべし。流石老練の頼政理
を察く或屬く或戒められる。義仲深く感悅く仰ぐハ御教訓の
如りむ死肺腑ふ銘く忘却仕るまく。某冨部ふ人となり昏愚ふく
又祖の家名を引興を程の澤量なくとく。君の御大事くハ久ふハ身
命を抛く犬馬の勞を辭くハ。ハくされる。頼政益を悅び子息の仲
綱・義子仲宗なる呼出く名對面させ酒宴を設く饗應れる。義仲主
徒厚く謝く此処ふ止宿をる。三日密々ふ行末の事ども示く合せ別を
告く立出れば頼政甚ぐ余波を惜く國宗の太刀一振餞別ふ引。後會

至約〳〵遂に袂を連ねて

巴御前勇力之條

扨義仲主従は都の地利を委〳〵見廻りぞんより摂河泉大和路を経て再度山城に入り東國に戻も一見せんとて江刻より美濃路を徑歴て次に大垣の八幡宮へ參詣せれば社前の馬場に四五人の青侍責馬〳〵互に秘術を尽し曲条倫条種々の藝を競合てあり義仲主従立停りて見物せれば昔侍に条草例〳〵躰あて馬を繋ぎ息を休めて折〳〵あれ俄に旋風吹裳〳〵青侍の僕の辺に有る五六蓋の菅笠一度に吹散るが其音ふやぶるる紀乙一疋の馬忽ち狂ひ出し繋ぎたる口綱曳切て一散に馳出しぬ仲間小者此躰を見て大に周障して是を曳留んと馳行ぐ馬は頻に嘶く近付者を刻殺〳〵踏仆〳〵狂ふぞ往来の老若大に騒動し小児女童は迷惑ひて泣叫ぶ義仲主従も興を醒し馬の跡をもとめ走

行くるに馬は いよ〳〵疾走りて河辺の塘を霞の〳〵馳行るに杏の向より年齢十三四才許の乙女物あるひに出るとんで手ごろの盥に濡るを布を入高足駄くるくる来るを前面より馬の嵐吹立てきるを些も動ぐる色なく静に身をかるして馬の後に引る口綱を足駄にて なぐるとて踏に是は如何さしも猛く狂へる荒馬僅なる乙女が足に踐止られて一すも走らず鉄は高く嘶く狂ひ回る乙女は片手に盥をとり頭に頂て片手に馬の轡を把て曳鎮る其うちに中間小者追々馳着て女が怪力を驚歎し馬を繋て曳うりぬ義仲は眼前見を見て大いに驚て世の中に勇力ある女も有るかな和漢女勇を挙るは是中にも彼荀崧が杜曾が為に囲れ城中餓死て防戦叶ひがたく見えける時荀崧に小女年十三にて士卒を率て城外へ突出し數千の敵を斬拔周紡といへる者に敵の兵を結遂に敵軍を撃散して城を全くせ

より華陽志に載せる所と古今未曾有のすぶみひしに豈さもんや我
國にも此男婦あるんとハそも雑人の女ぞ尋ねよとて土人れ乙女が父母の
舎を問しめらるに彼ゲ又そりと小録をも知行せず武士ならぐ朋友の論言
ふとりく浪牢し今ハ當村にきろく僅の田畑をかとめ耕作の業にせ
を送きり又が名を安太夫といひ女を巴と称居宅ハ云云の所なりと委く教
示しそろにより義仲悦び兼平ホと俱に安太夫が宿所へ挙行ん事に最
も妨嫌萱葺の軒端のたのぶ生乱き斜に立る拄ぶに細紀烟の透窓張し
反古も破ぐちに離の紆も草深く荒しそろに庵の内に六十に近き老人の身に
て茶染の古絮衣をまとひ何にかあるん書籍を續居そり彼巴ハ濯し布を背
門の方に乾けるひさんかくれだ義仲庵に立入て案内しに安太夫紆しげ
なる面色にて續居そる書をそくに差れ見鏡とりて立出見ハ何國の御
方にて何の為御入来にと向義仲一揖しに某ハ信列木曾の者にて狩

ぐり紀義なぐく貴老に頼入ると有て推参しに若しそれ席上を紆し
むりもとと仰る老人ちひんぬ妨嫌草屋を厭ひむりどバ先
彼処へ通らせ給へと答て義仲悦びまひ今井通口と俱に一間所に入主客坐定
すりて後仰るハ某特そぐ別事なりもど今日八幡宮の境内に
て責馬を見物しいひしに云云の吏に馬の荒出せし武御息女ありぐのす
ゆく曳鎮むつり余のこの赤しさに御息女と知ひなるぐやと寄ぐ一面の
交りぐにかな紀貴老の宿に参りそり某ハ木曾権頭兼遠が嫡子に義仲と
名称者なり貴老に以前に弓箭に携りむひしと安願ハ姓名をも顕し
息女に一面の交を紆しむと宜へむ安太夫ハ手ぢら紀権頭兼遠ぐのこと
音に安ぬ木曾の住人其御賢息に人来て辱れ某ハ武士にて嗚
呼ぐしなぐ近江の山本兵衛ぐの方に事ひひし者にひぐ八年以前小朋友
の縁言にとり浪々の身となり當地へ引移り土民となりく甲斐方紀鬼

義仲主臣
筑中ゐ
巴子が姓力を
怨る図

命を繋ぎたいひしかそれより三年を経て妻をも先立て一人の娘を使ふ老と雑
ひい娘の名を巴とやいふ。當年十二才。生得大形ゆへ。力も血気の若者ふ劣らず
ざと業ぶ耕作の一臂を扶け信をしく親ふ事へいされども今仰もるるこそ不側
の怪力ハ及くる業もあるべしと恐るくハ御辭退ふ申しけ。義仲押返し。我眼
前其行迹を見て。感慨の余り斯推参せりふ婦人を空しく民間の妻妾
にせんハ美玉を泥中ふ埋ぶこと。甚ぶ非禮なぶ。若しうずハ業ふ賜ふべ
やさもあらば後年我室となり生涯見捨ハじ。御辺もまた我ふ曾ふきこと
く。農業を捨心閑ふ老を親ひ迎ハ村落ふ持景ふ聊勝りいんと
悃望あるふ。忠太夫此刻を聞く心逆ひ。ふ決まるこく難ぶ巴を勝近く招
て義仲の仰を云はせ。汝ふ心を如何ぞやと問。巴女ハ深く愧らんさふ気色ふ
く答へるやう。女童の身ふ有まじき行跡たるく殿達ふ見咎られまじきものの
耻ふハいふ人數なれ身をもく宣ハるを雑て吾像ぶ心ふく何と答へまう侍

る人なれ平日の御教訓ある女ハ家ふ在てハ父母の心ふ従ひ嫁てハ夫ふ従ひ老てハ
子ふ従ひ敢て自ら専ふ為ふ所なしと仰せ上。左ふも右ふも父の御心ふ任
ぶ。但し吾像ぶ心ハ父をぶふ育ふ親人あるぶ。此身ハ如何なる憂苦をも厭ハ
と手素ふ振ひ定めて為りぬと寂長しくやられぬ。安太夫大ふ悦び。御身ぶ年
来の孝心ふくハさぞあらふ。天晴古の安太夫なるべ。幼ひ卿ふさのみハ物を思
くそ。死ものを。零落せし身ハ如何せん。されども天道ハ猶明ふく御身ぶ孝
心を冥感あれぶこそ。木曾権頭の賢息ふる植生の小屋を紡ひ来ふりと
云く。義仲ふ向ひ。少せ上くし巴女の心ハ只某ふ振ませぶれ。君ふ進いて
召。召具しく侍女婢ふもたしく使ハせ。と頓ふ義引ぶるふぞ義仲悦喜限
なく。二面の交りぶふなれ我卒示の所望をも啓ふて。息女を賜ハるふ嬉し
よ予まぶ若冠なれども息女を結ふて敢ぶ疎ふる心なし。ら篇の家ふ
生まるふ者ハ美悪ふかくを賢女婦勇をもて具ぶれ。文年是と望

ーお。天幸ハ良縁を下ーさ。予ハ此婦を配偶ーヨ。初ハ我ハ息女ハ勇刀を乃ゝ懇望せーお。其言を聞其人を乃れば。容儀端雅ハーく賤ーさど。年稚ーとハ雖も身ハ栄利を欲せざ。只父を孝艱せん事を願ーて健気さよ夫孝ハ百行の源ハーく。士孝なれば君ハ忠ナり。婦孝なれば夫ハ負なり。予ハ

ゝず此賢女を得ると宿望遂ハ達ける前兆ゝり。但ー某ハ是より東國を往歴ー古郷へ帰ゝ後使者をもつて迎へ。其時親子ともに木曽へ来ると巳ゝと約定あるゆゑ巴女父子大ハに悦び。再拝ーく恩を謝ー村醪をすゝめきゝりく約定の盃ゝりハーゝり。是ハ因ゝ義仲主従ハ孟ハ一宿。翌日ゝ旅粧ーく東國ゝりへ赴れ玉ひ。

義仲与頼朝契約之條

木曽冠者義仲ハ巴女を得ゝ心悦び。濃列を立ゝ尾張へ立越。ゝより緒國を往歴ー伊豆国蛭ヶ小島ハ居りむれ。前兵庫佐頼朝ハ行へ立寄ゝ。

此頼朝ゝ申ハ故左馬頭義朝ノ三男ゆゑ。母ハ熱田の大宮司季範ノ女ゝり童名を幡屋ノ武者王ーも又鬼武者ゝも申ゝり。平治ノ役ハ源軍敗績ーける時父兄ゝ倶ハ戦場を抜落ーけるハ竜花越ノ山ハゆく味方ハ後ゝ只一人東國を志ーく落けるを。参河守頼盛ノ郎党弥平兵衛宗清ゝ云者生捕て都へ曳けるハ。清盛ノ継母池ノ禅尼深く頼朝を憐ゝ小松重盛ゝ示ーて合せ。清盛を撞々宥め。遂ハ伊豆國蛭ヶ小島へ流罪ハ所ゝ。実ゝ是重盛ハ深く紆略なり。暗ハ其心紆を尋ゝハ。其頃関東ノ武士八平氏四藤私党をゝゞめ。其余の輩も往昔奥列ゆく前九年後三年の合戦ノ剋ゝ源頼義子息義家両将軍の旗下ハ属ー軍功を属くーけ。元来頼義義家両将ーも武勇ハ和漢ハ例なく程ノ英雄ハく智略ゝ古今ハ独歩ゝる大将軍ゝゝ。弓矢ハ引絞り高慢心なく。英雄を懐け士卒を憐む良将ゆゑ軍功ある輩ハ別ーく厚く恩録を与へ。是ハ因く

諸人其智勇と仁德とに心を傾け武士たる人八々る各將の下風に立ることを其甲斐あれと押て源家を主君と仰ぎ代々異変の心なく傳たる事しかも忽ち爲義義朝朝敵の名を蒙て平家の爲に討亡され一門亡滅せしかハ平氏四藤私黨の武士牙を噛み怒り憤きまゝに朝敵の名に悼りて猥に兵馬を動さんとせしかども若頼朝を助て殊戮せんと關東一致して京城へ攻上り源家の吊合戰せんと無念を忍び只管佐殿の一左右を待居たり。然る に重盛八明智の賢將なれと早く間者を入て此事を知を安。扨も頼朝を殊せば天下大乱を生ずべし。先々死罪一統を省て東国流罪し。當今関東武士の心を弛せ時々恩惠を施し。八平氏四藤私黨を平家へ飯伏させん。然るに頼朝野心を捨て殊せんを安からずと思惟し。爰を練て。伊豆國蛭が小島へ流されたり。當國の押領使伊藤二郎祐親ハ平家無二の忠臣なれ。兵權強き者なれ。彼が密意を言含め嚴しく守護させ表向は重盛より頼朝へ折々衣服金錢を贈り萬事不自由なきやうに計らいやされぬ。佐殿も其密計を知召れハ深く重盛の恩沢を感悦あり重盛は謀なきやうに深く悦び此上は関東武士の心を懐ん。先降人に出し。藤実盛を宿し。武藏國武庫の別當となし。其他熊谷直実平山季重岡辺忠澄なんど。皆是義朝の頼を切る兵にもあり。強く平家へ冠し。なを徒なれども。楯下の降参を宿とのなるべ。各本領に安堵させられぬ。されど関東武士も重盛の仁恩に懐き忠を平家へ傾くる徒も多り。嗚呼危ふ頼朝。重盛長命なれ。終に青雲の時あらんと。小松殿早く逝去せしかハ佐殿用運の端なり。是八さしあたる佐殿流罪もとめ永暦元年より應保二年まハ伊豆の神猟弊坐の構に館をまつらひ住ぬ。是を八牧の別所とし。為に平家の一族判官兼隆と云者聊罪有て都の住居を拂れ伊豆へ追下し八牧の別所に置れ

祐親へ下知ある是も実を兼隆を佐殿の横目ゐせん為の謀なり。是ゐ依て佐殿ハ牧の別所を明らむ。門国北條の神沼の館ゐ移り。仁安三年すぐ住ゐ。時ゐ義仲ハ兼光をもつて潛ゐ案内させ。是ハ故帯刀ゑ二男冠者義仲と申者ゐ。推頭兼遠ゑ紆ゐ人となり。北度緒國を游歴の序。御訪ひのゝゑ推参仕まつり。苦ゝゝゝゝどハ對面ゐゝゝと申させゐ。折節佐殿の腹心の郎黨安達景長と只二人囲碁ゐて御坐ゝゝゑ。是を伺ひ大いゐ悦び。疾々いゝせられいへと御答有ゐより。義仲も喜悦ありて歩通り。初て佐殿と對面あり會釈ゝゝ仰ゝゑハ互ゐ親ゝ兄族ゝれども。世の不肖ゐ押参して らき俱ゐ日影の身なれど。御在所を知えべきども。今日はゝゝ一書の音信も通せざるハ世人の譏論を憚る所なれば免させゐ。某こそ帯刀先生ゑ二男駒王丸の名を義仲と名称い初て高顔ゐ絹ゝ大慶何ゑ是ゐ過いゝ。と礼儀正ゝく仰ゝれば佐殿も答礼ありて。緘ゐ御身木曾ゐ人となりこゝ

ゝゝゝゝ承きゝゐ。配流の身なれば一紙の素情をも通ぜざるいゐ。ゐ捨ゝ山川數百里の旁を厭ゝゝ。初訪ゐ嬉ゝさゝゝゝ。景長ゐ命ゝ瓶子ゑ肩斗ゑんど取寄盃をゝゝハ。其より酒者を調ゝゝ一門王從ゐ昆ゝ酒宴を催ゝ列位醉を表ゝゝゑ。其後深夜ゐ如ゝゝ酒宴を収め。佐殿と義仲只二人閑室ゐへく膝突ゝゝ。門の亡滅を悔ゝ平家の暴悪を難ゝ。蜜ゝ義兵の高議をゝゝゝゐる中ゐも。佐殿仰ゝゑ。清盛時の威権をゝて王位を狂ゝ万民を雷ゝ。敗亡せんと必せりとゝゝゝ。源氏ハ且朝敵の名を得ゝれハ猥ゐ無名の雄を上ゝゝ。天子ゐもあき親王ゐもあき。朝敵の罪名東免有ゝ。平家追討の令旨をゝゐ賜ゝゝゝ。即時ゐ一言報恩の武士を集め。我を東國より起ゝ。御身ハ北陸道ゐ旗を翻ゝゝ両道より都へ攻上り一挙ゐ平族を平ゝ。孝年の爵情を散ゝゝ。但ゝ戸と御身と何方が先ゐ帝都へ攻ゝゝ。互ゐ同合せ敢て自立の働ゝ有ゝゝゝと仰ゝれば義仲も

然るに互に誓約をなし、斯く義仲茲に二日滞留あるに終に神沼を立て往々に武藏に入り、伯父葛貫別當能隆の許に寄行其に両三日逗留しぬ。

義仲与実盛再會并義大虎丸之事

義仲は、能隆が館を立出て永井の春藤別當実盛が許に寄行後者に案内させ姓名を報じ申されければ、実盛大に悦び早速に請じ入賓主坐定より茶菓を献じ後ち云へる。珠らしや弱王公某往年畠山重能が家に憑し。君いまだ二才の時母君と倶に其一なり。権頭兼遠が家城に起臥彼人に御養育の義を託せし。昨日今日の中に指を折て早十四年の春秋を過せり。折に觸れて兼遠が消息に堅固に成長し給へるよし聞公勢遑なれどいまだ参向して高顔を拜し奉ず。年来の遺憾に存じ申ひしに賀を曲て御来臨あり。社嬉しく実も帯刀先生の公達とて栩貌形容父君に似させ給へり。天晴源家世に時めき給へるなるべし。肥馬に柔羅綾を着て前後後隨の兵數を揃へて御一門を裏滅し平家繁昌の時代なれば手鉤の御身も僅に両三輩の従者に扶けられ草鞋を行路の露に沾し給へる痛しさよ。落涙して十名ばかり義仲も恨涙に袖を漫し給へるが稍暫くして宜に我嬰児の昔已に義平が害せしを聞べき重能と御辺の厚情に身の横難を免れ兼遠の手に入て成長を得たり。我を產し者は父母なり。我を生せし者は重能と足下と兼遠の三人なり。其恩の高大に比しては須弥山も猶低く深きに比べは巷冥海も浅きべし。然るに我不肖にして萬一の恩をも報ぜざる内早く重能は死亡せられし由遺憾是に不過北度諸國旅歴の序幸なれば當國へ立越足下に初見参して活命の恩を謝せんと推参せしと仰られし実盛喜悦に堪ず酒宴を促して互に積る物語して折しも庭前へ

一頭の犬出きたりて。坐敷の八盃盤をなめ。賓客酒宴の最中なれども。
忽ち尾を垂れ耳を伏て外の方へ去りぬ。義仲其躰を見て心中に疑り思
ひ。凡畜生の中に殊に鼻骨敷肉を好む者なれば。酒宴の躰を見て特に
庭中を不去臭肉の余れるを投与ふるを待べきに。却て怖れ悼うろたえ
なく去りぬ。其意得ずして。実盛に對ひ曰く。彼犬を貴辺の畜ゑ猟
狗なるべし。自余の犬と違ひ酒宴を見て退き去るは頗る心有げなり。是
八日来飼教へ置るゆへと問へば。実盛打笑ひ。彼犬には
されども故有て今八手飼ひなし。彼犬に付て一條の珍しき話ありて
宴せずして。此所より一里ばかり東某村に壹人の悪女年の比十七八歳。
頼もく恒の産なくして博奕淫酒に耽り。或時いたく酩酊
後中に其所にもなく徘徊し。誤て臥る犬の脚を踏しかば。犬は是に驚き
彼者の脚を咬ひ。悪女年大に怒り。即時に犬を捕へ縛り已が家に引

返り種々に責困しめ。刻に翌日河に沈んと。件の犬を曳行処に前面より一人の
糸商人来りて悪女年が犬を曳行を見て其故を尋るに。その罪あまた
流に沈めんとなりと答へ。其時犬を糸商人の面を見て泪を流し助命を頼
む躰なれば。高客是を憐て價を贖ひ犬の命を乞ひ。原来多欲の売渡
是を承引銀子を得て犬を解放し。彼商客の嚢中に金銀の多く
有を見て。忽ち欲心を發し。遣過しなく彼商客を切害し。屍を河辺に提行
葦間に捨。其上に葦の葉折かけて覆ひ隠し。さあらぬ体にて已が宿へ帰り
いぬ。彼犬潜に見定めて。其屍を廳前へ引きて白砂に跪て吠るか
ごとく。狂る処有べし。されども某も初は心付ざり下郎に命じて追出させ
ども。渠如何鞭撻れども更に居処を去ず益哀に吠て眼中より泪を流
すこと雨の如し。茲に於て某も不審に堪ず。紙に犬に向ひ汝何故ぞ有
やと問へば。犬點首して下郎が衣服の裾を咬へ曳き出んとす。是に依

く僕が命じ犬の行処へ従ひ行くべしと。彼川辺葦間へ独行又悲しげに吠ゆ
ゆへ僕何心なく折ふし葦を掻分れば朱に染まる死あり。依て犬を曳
く皈り云々の趣を告げ。叔と子細あらまく再び犬に向ひ汝彼者を切害
せし者を知りやと問へば渠は黙首僕の裾をくわへ引去んともすること以前
のごとし。是ゆへ犬を先に立て三人の捕吏を遣しぬ。犬を一里ばかり
行く。一軒の草屋の門に立。捕吏を顧て梟を鳴しぬ。是ぞ曲者の所在な
らんと察し戸の透間より窺ひ見るに一人の女年前後もすぐれて在
頻に戸を踏破り狂入る。大先急に進入女年が足を強く咬て放さず女年
は是に恐れて働き得ざる。犬を排ひ退んとあせる間に捕吏の者雑なく
女年を搦め戈皈りし叔即慰跨問しに渠已が悪事の條明白に白状し
ひぬ。依に因て渠を死刑に所す。猶渠が家内を捜索に奪掠せる金嚢是
あり。改られば沙金十五両余白銀七両ばかり叔彼高客の屍を黙検しに

生国何国にも知れざるべし。辺りの寺院に埋葬し。員子は吊料として其寺へ
寄附せらるべきの恩を感じ仇を復を義犬のくわへて虎丸と呼ぶ畜犬の
忠勇の重上角余の犬と同じ。飲食を喰残しを以て使を邸中に
せしを人絡を生ずるを人に等しく世に珍しく紀良狗のくわへ一五一十を
れば義仲倩其物語を聞く感涙を流して仰せられ犬を其種類
甚だ多く毛色も准一方ならず。酸の虞晋の桀。楚の獷韓の獹宋の猘是皆
良犬の名なりとぞ。彼廣陵の揚生が畜ける犬。草野に火の起る所知
身を水に漫して主の揚生が醉臥る四辺の草を沾して主の焚死せんとを
救ひ會稽の張然が飼ける烏竜と云へる犬。奸奴を咬ぎ主の危難を
救ひ書籍に挙げる事を得るとぞ。眼前に奇特の物語を安
珍しきよ。盤古氏の時の戯言を信じ敵首を取。女を貪り悪犬非衣令
公度を練り李甲が格言を弱く空衣を咬ぎ憤死せる毒犬を假虎

義大悪少年
を咬ぐ
賊情を露
図

九と日ふ はるゝ給ふぐるぐる願ひくを呼出しくゝ見せるくと望みる。実盛承
ハり。虎丸来ると呼れば直ち應じく坪前の大庭前へきたり縁端近くはか
居まり。義仲熟と見るに犬吠長く眼実く肥大めゝ。毛ハ黒白斑なるが角
逞猛く勇める勢ひを備へれば。稍ゝ感歎しの。噫呼非情の数頸
あるるが義犬あり。恩人の仇を報へ泉下の冤を晴さんとせば我或
人ハ生るるあり。犬の小なる我狗とのみ。大なるを犬といふ。其張啄なるを者を
善猟を見る我田犬といふ俗称の人鷲犬なり。其短啄なる者ハ善守る見と吠
犬といふ賊を防ぐ非常を守る。家犬ハ常と守る。犬を孕ること三月ハ子
を産と上要宿ハ懲り。干弭木ハ属もて繩く霊あるとし余熟ハ勝ちり。
ひるるが良犬を振く獲物ハあるべし。我今此犬を乃るハ勇壮ハ〻く張
啄なるハ所謂田犬なるが者なり。我住地木曽北陸道ハ双ぶ深山幽谷の
地ハ〻且夕田猟鷹鳥狩を業とせれば。各犬を得く山野ハ従ひ

亦何をか憾んくゝ頗る懇望の色面ハあるられより実盛早く見を察しくゝ
ハ君さらば御所望なくゝ此犬を進ぜい愛くゝ構く愛憐を
加くゝ飼せるくとハ義仲斜なるを御喜悦ありて厚く礼謝を述べ
虎丸を流石実盛ち日来の情を捨く他人の手ハ畜をんくと我心苦くゝ思
ひ見前残低を愁然くゝ見えれば実盛其躰を見く声を厲まし汝
我手を放ち他へ行を憂ふハ申さくれども苟も此君ハ八幡殿より四代の孫君
木曽義仲公なれば実盛ハ百倍勝まくゝ主君あるを心を責く事よ我を原
源家ハ事く数度の戦場一度も不覚をくるを君の賞翫他ハ異ハくゝ鴻
恩を蒙ること人ハ勝まくゝハ。平治の軍ハ頭殿ハ別き参じ世漂浪の身と成
源氏世ハ出るべ兄期を待ん程の足休ハと。假ハ平家へ降参せくゝハ豈紆人
小松殿の執達ハよりく従来の本領安堵の上ハ當國武庫の別當を任
ぜられより此大恩を争ふ仇をうく報ぜべ兄今ハ平家無二の忠臣と成

ぞーと胸を究め世人の嘲り我も顧ぶに斯く世に在顔ハとれども実に我
武道慶を累さり其故を相國入道殿に申官位昇進ありきに奢耽累
慢の行迹月を超て増長し賢息小松殿の風儀を納む偏に我侭の行条
唐の安録山に一般さり争う久く栄曜を保ち得て死頓て源氏の白旌洛中に
充満せんと鏡にかけて見るが如し其時に臨て我平家の下知に従ひ源軍に
向て是三代相傳の主君に弓引き逆臣なりと迚平家を背き源家へ
馳加り平軍を伐ん是恩義我も知ぬ賊臣なりとも何方に従ひ何方を捨べ
き我ながら一旦の過に依て反覆表裏の名を流さんこそ千悔もとれども
ど只都に大事有と安き先祖を望て討死せんの外絶てなし
も猶降参不義の汚名を雪ぬはさぞ斯浅猿き我を捨て勢ひ寄じてい
日本の大將軍と申奴れ共君に詞書て畜類と云ども恩報の
いとだにあらじぞと人に云ん

り義仲に大義を勧めまゐらせ共今は平家恩顧の身なれば露に
其こと我口外せんも都への聞えを憚り天に統て義仲の心を屬しきるとハ
後にをあり合されける虎丸ハ実盛が刻を安るてや頭を低て涙を流し
て申しけるは来一戸の外へ出去り時に実盛近習に向ひ長物語に酒
宴の興を醒せり銚子を改め今一献を勧めまゐらせ給へと命じ給へ義仲是
を制しもの先祖より數盃を傾け頗る酩酊せり今も盃盤を取り更と
固く辞しも更ふとりさしで左も右もなく酒毒を取り饗膳に山海の珍味
を竭して餐し進らせる義仲主従深く実盛が厚志を謝して夜程に喫
終り其後を止宿し翌日実盛に別を告彼虎丸を従者に率せて立出む
とて実盛も余波ハ盡じとて一里許見送り遂に袂を別らに義仲ハ信列
へ実盛ハ永井へぞ帰りける

義仲母公を去并観心房相義仲條

去程ハ木曽義仲ハ武藏を経て古郷の空を臨み路を急ぎ給ひ日を経て木曽ハ飯者ハ無足の日ハ昨日今日の如くなれど仁安三年二月ハ出て月半十月ハ飯田を過ぬ旅行の間凡九ヶ月ハ程なりけり兼遠ハ義仲の飯りを聞て歳乃て且悦び且患ひなげ先其安躰を賀し扨ハ御母堂小枝ぶの御事去る八月の末より假初の風邪の心地あくまで臥ぬ日数追て疾病となり医療手を竭し加持祈禱怠りなくよめども定まれる事ハや聊の験もなく次第ハ新たなる乃ち何卒生前ハ御親子の御對面させ進ぜんと願ひ心中の國々へ早使を立ぬれども無遠ぬ事なれど只東國を指て向ひ者ハ多く飯らと心を困めひしハ能で御飯國ハ思ひ怠て母君ハ絹ぬぐとおぼえ義仲大いハ驚き頓て母君の病床へ立入其より侍女おやさせ給ハ斯と申ひ嬉しがハ重て枕をもたげ義仲を近く招て苦しげなる息の下ハ仰せらるハ

妾去る秋の半より假初の事ハ即ち弟ハ病若をしく今ハ此世の限りと覚へ候ぬ末期ハ今一度見へ進ぜんと所有神仏ハ祈誓しまつり甲斐あり今逢まゐらせ嬉しさよ妾此國ハ由縁有ふもあるまじ初御身を懐みて来る時より臨終の今まで兼遠夫婦の人々重代の主のごく敬ひ傳ひ乃ち世ハ報じ難ひ妾空しく後ち夫婦の人々を実の親と思ひ朝ハ夕ハの孝行怠り給ふ兼遠主の力を借て又御の家名を引興を時節もあらば講て短慮殺伐の行迹なく只仁德をもつて人を懐け萬の進退兼遠主ハ智慮深ひ人々と高議し其良ハ就て進も退もなく古へも今も智勇有人々の其能ハ慢じて國を失ひ身を亡ぼす例ハ多く已ハ御身乃又君ハ武勇乃ち世ハ高名しまつる一朝の短慮より身を亡ぼし家を失ひて妻子をも零落ぬ前車の覆を見て後車乃戒とせよと思ハ

乃事をやりなんぬべし忘れも智ふ慢し勇猛憑て壮國人ふ跡ゆれ人と
妻死したりしも追福作善ふ心を用ひ人ふ時節をまち又君乃家名を
引興し人ふてそ妻ぐしあ七基乃塔を建るふ勝る追福ふいぞと操返しに
練め鍛言め人ふ義仲悲歎の中ふも母公乃教訓骨髄ふしみ洞なる仰るハ
宜ふと処悲く理の至極ふく肝ふ銘ず忘まいぞ其ふそ吾母いまぞ齢
傾たふおもぐそを心を強くなし何事をも念じ人ふど勤く薬湯を服
し今一度快復し人ふと練め人ふ病者ハ歩黙首人ふのみふく何事をも言
ふ人ふどゆ乃内ふ佛乃御名を乃そ新ふひるぐ其翌日酉の尅ぐらふ眠ふ
ぐとく息断ふひり義仲ぐ悲歎そ人ふど更なり兼遠夫妻侍女乳人で
深く愁傷し哀泣乃声室中ふ充々満ぐも返ぬ道なれど泣々菩提
寺ふ送り埋葬しく遂ふ北邙一堆の塚乃主ぞなしふる義仲公人の
慈母ふ別まく腸を断歎ふ沈ひるぐ世ふく母君乃後生善所乃為ふ

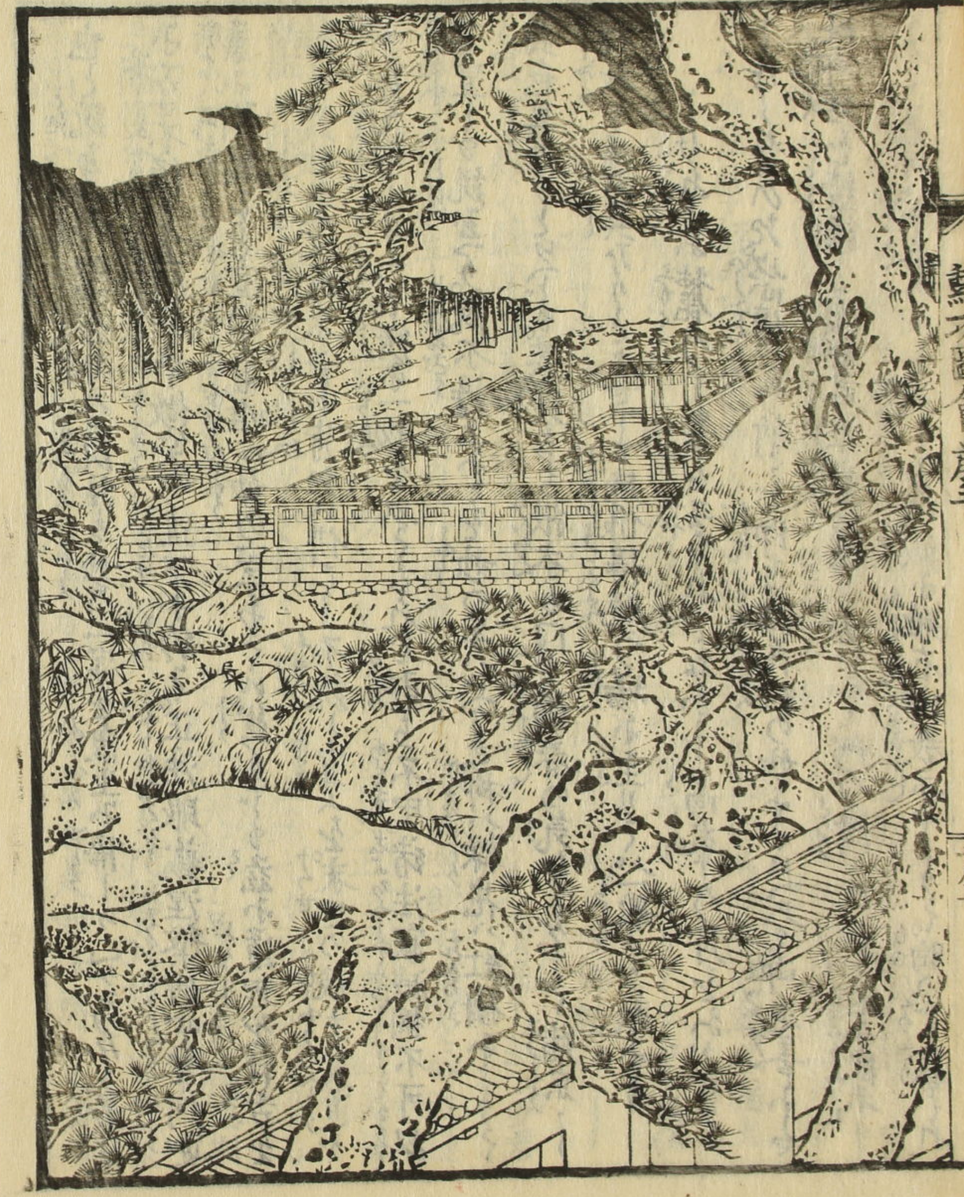
もしくく未曽乃近卿須原寺ふ結住僧観心房と人道徳いぐれ聖人う
御対面あるく仰ぐる其ぐ母既ふ無常風ふ誘れ九泉乃旅ふ赴ひ
ひ其菩提乃為経論を摺續しくいぐそ女人成佛乃為ふ如何ぞふ
経を續ひぐ願ぐを長老我ふ示しまと問ひ観心房答ぐまれる
ハ君いまぐ御若年ぐふ母君乃善提乃為ふ編経しまとの御志ぞ雖有
くれ抑如来一代乃経論ぞしとぐも其功徳法華経ふ増りのいぐ大法
華経の徳を独女人成佛乃ふあぐ山川大地千草萬木まぐ佛果ふ
いぐりい扨如来乃法門八宗十二宗ふ分き自ら他破の見熾盛ふしく因を
瞋し碍月を振大乗小乗頓漸乃勝劣を争ひ横説堅説ぐとぐ其
要八一致ふくい鈍れども女人を五障七去十悪と家ふ罪深く已ふ大論
ふも女色を視し以赤銅如摶眼中其身ふ近付ハ如觸毒蛇と戒ら
或八女人を以く若死蛇くもひ或八内心如夜叉なぐ緒経ふ深く厭ひ

されど成佛得脫ハ最も難たきなり。されども諸佛大慈悲の誓願を起し。女人成佛の方便を成ずること。弥陀の誓願を初とし。其他挙て算べからず。中ずく法華經の功力第一なり已ず提婆品ず竜女成佛を說。又草木國土悉皆成佛の說きされど増さ人間ず於てやや。假令女人ありとも爭ず成仏せざらん大聖世尊此法華經を說ずひく。只一偈を聞者も成佛疑ひなしと宣へり。縱ず聽聞隨喜の一偈の功德さへ如此況や君旦夕ず讀誦しまゐ妙君九品の淨土ず生ずむ乙と何の疑うゆ侯べき。君さへ行住坐卧ずも心を妙法蓮華の妙の一字の上ず置ずず。抑此妙の一字を。佛心宗ずハ正法眼藏。金剛正体祖師心印。吹毛劍。無位真人など種々ず號け。淨土宗ずハ弥陀と云。真言宗ずハ阿字と呼。其外道家ずハ谷神と云ひ儒者ハ大極と号し。華嚴法相三論俱舍成実律宗ずいたるまで深秘奥義とする所ハ皆此妙の一字の外ず不出。故ず如来も汝等舍利弗聲聞及菩薩當知是妙法諸仏の秘要也と說ずず。佛四十余年の說法を妙の一字を衆生ず悟しめんが為なり。最後ず一字不說と宣ひ。拈華微笑の直下ず於て。正法眼藏涅槃妙心摩訶迦葉ず附屬をと宣へり。唯心妙の一字あくまで茲ず道理を付舌を翻しハ妙の一字の本旨ず背ぎ。佛法を不說と宣へを末世の衆生貪道ず。說九智をうつ。說ず一物を說くもそれで即ち不中。諸法寂滅相不可以言宣しも說ずず。說不得上ずを妙の字ハいべ。柳ハ緑花ハ紅樹ずとりく其色異なりとなくも。其發する根本を問ば陽春の気なるべく。諸宗の指教る道ハ異なりとやせども。成佛得脫の場ず至りぬハ般より歌ずも

とけねずず麓の雲ちを分れど高峯の月をおがむる

とはるねずひ心傳心の所を即ち法花經の妙中くハ。戸々御追善ずを此御經を續編しまゐ母君尊靈成佛しまゐと何の障ひ。紙を惟ず說示しれど。義仲隨喜の涙を流しまゐ。紙ず雖有御教示ずよりく。胸の雲霧れ

ねのるの
根井
大弥太
勇力の
図



ゝ師ハ実ニ當時の碩德なり。今日より義仲ゞ祈り師と頼ゝまゝひ乞。
但し一人ゝ参ゝ須原ゝ観心御房ハ博学高德なゝ耳なゝゞ善人相を人
定め人の未前を察ゝゝ掌の物を指ゞゝと云ゝ願ゝゝ其ゞ相を見行
末ゝ吉凶禍福をも指示ゝゝ乞望ゝ。観心房哂ゝ曰貪道佛道ハ人ゝ
へゞも爭ゝ如来のゞゝ六神通を得ゝ人の未前を察ゝゝを得ゞ。其ハ只
観心を誉ゝゝゝ空言ゝゝゝ取あゝゝを不曾殿猶強ゝ請需ゝ
ゝ不ゝゝ。観心已事を得ゞゝゝゞ心のゝゝゞけを相ゝ進ゝゝゝ。義仲
ゝ面を稍久ゝゝゝゝゝハ藏ゝ君ハ大将軍ゝ威相を備ゝゝゝ。されゞも其位
ゝ到りゝひゝハ門屬類ゝ離ゝ久ゝ栄花を極めゝゝゝ難ゝ。其故ハ包気不
顯德ゝゝ相ゝゝませゝ。此相を轉化ゝゝ生涯安楽長命なゝゝとなゝゞ只
身を慎ゝ切を他人ゝ譲ゝ。亟ゝの人ゝとなゝゝ若十分望を達せんとゝゝゞ
稠ひ忽ち御身ゝゝひゝゝとゝなれゝ。義仲少ゝゝ。藏ゝ師ゝ眼力ハ天眼通

とゝゝ。我慎ゝ教訓の旨をゝりゝゝゝ。ゝゝ施物を引別を告ゝ餞りゝ
ひゝゝゝゝ心中ゝハ我平家の兇暴を伐且将軍職を得ゝ夫ゝゝ身の本懷な
ゝ命短ゝゝ患ゝゝゝゝ。ゝ長命なゝゝゝ。碌ゝゝゝゝ人の下風ゝ膝を屈
せんハ大丈夫の所作なゝゝゝ思ゝゝゝゝゝ不歆なゝゝ

根井父子屬義仲條

斯ゝ義仲ハ観心房ゝ勸ゝより母公ゝ追善ゝゝゝ朝夕法華経を誦ゝ喪と
動めゝハゝゝゝ何ゝゝ中陰も充れゝ兼遠兼保ゝ道ゝゝ計ゝ使者をゝゝ
彼巴子父子を呼迎ゝ。父安太夫ゝハ郎を父ゝ安居させ。巴子ゝハ武藝兵学を
学ゞせらゝゝ。元来聰明令利の婦人ゝれゝ。日ゝ後ゝ武術軍学ゝ上達ー
歴々ゝ男子ゝも巴子ゝ向ひゝゝゝ及ざるゝゝ多れゝ兼遠ゝも希代ゝ勇婦哉
と舌を震ゝゝゝゝ恐まゝる。ゝゝゝ光陰押移りゝ義仲早十九才ゝなりゝゝ
れゝ海野入道兼保ゝ女山吹をもつゝ室家とゝ。巴子を娶ゝ妻とせゝる。両婦

婉娩貞従の賢女なれば互ひに相娵の心なく信々木曽殿を傳たつく
なるべし。義仲も両婦を寵偶あふこと浅からず。日の契濃ふ偕老の
深く。次の年山吹前懐姙あり。玉のごとく男子を産む。義仲をよろこび兼
遠又子の悦び大方ならず。家門他門より祝賀の使者門前ふ市をなして終
なり。義仲初くの御子なれば名を太郎丸と呼ぶ。後ふ清水冠者と
いひ。八共若君のこなりし。去程ふ義仲年の長じるふ従ひ。文武二道ふ達
し胸ふ呂望轉信が智を貯へ。腕ふ項羽樊會が勇を蓄へ。遠近風を
望んざきなり。其旌下ふ属する者日々ふ不絶。心なる土民村翁まくも木曽
殿と称し其智勇を賞せざる人なし。茲ふ門國滋野の住人小根井大
夫行親といふ武士あり。數代當國ふ住居して武勇の誉を隣國ふ隠
きなく。家門も麦うなり。行親ふ二人の子あり。兄を大弥太忠親といひ弟を
揃六郎近忠と呼り。両人とも力量根ふ勝まさるが就中大弥太が五十人ふ敵
し弓馬戦剣の術ふも長じたり。或時又の行親家城の修理せんと人歩を以
て堀をのけ。せるふ。箇の巨石ふ堀中り是を取捨んとしるふ。五人の力
を合せども動かすこと能はず。大弥太ふ徳を果左右をうちふ日も暮ぬふ成
なれば。人歩の高議。明日五人歩を増して取捨んとす。其日を其侭差
ふ。大弥太其頃をいまだ十五才の童なれども。借みりひ。我生得力
量強くして。いまだ重しとせず。程の物もなきを。彼土中の石幾許の重さ有てか
飛くの者どもの堀徳をいでざる。石の重さ。渠ふ弱ども試ん。夜中ふ
人ふもよらせず。金剛履をはき。堀へ飛入件の石ふ手をかけ。曳起ふ。なて
重しとも覚へざれば。大弥太独笑して。これ石の重さふ。あらず人歩ふ
弱きなりと。温ふ。頃て其石を搏して平地へあげ。猶三町ばかり搏て
行。大道の真中ふ。あれて。既りの。斯て翌日ふなり人歩にも三十人ばかり。堀
の石を曳上んと行てかるふ。更ふ石あり。只巨なる穴のみ見えて見る

何者ゝ取捨しゆゑんと評議とりぐまなる処ゝ。一人の者走りきたり。彼処ゝ大道ゝ大石横たはりて往来ゝ牛馬通行ゝ妨となれり。忌ゝ人々力を合して取退くべしと大息吐くのみ。人歩ゝ益不審し。走行くゝ路ゝ真中ゝ大石あり。倩ゝ是昨日堀中ゝ石なれど。大ゝ抜ゝ斯許ゝ大石を一夜の中ゝ杏なる茲まく取出せゝ金剛力士ゝ業ゝ天狗ゝ所為ゝて驚嘆せざる者なく。壮人紆ゝくゝ野外ゝ搏し退くゝ。其後大弥太ゝ所為也と歩久れく。諸人其若年ゝくゝ怪力ある哉賞賛し。其風説隣國ゝまでも久々ゝる大剛の忠親なれど天下ゝ手ゝ立者あるべしと思繕り居ゝ頃日老となく若となく。木曾どの勇武を賞しく。其汝汰街ゝ喧し。大弥太を木曾殿ゝ旗下ゝ勧むる者有ゝ。忠親嘲りゝ世人何ぞ耳ゝ尊び目を賤しむるや。夫物ハ見と聞との違ひ有。彼黄門の儒子何紆ゝ勇有ゝ斯田夫野人を威ゝ。我對面しく渠ゝ新膳を拉んと。夷物造の大小指強らし。一僕を

従へ兼遠ゝ家城ゝ到り。案内しく木曾ゝ面會せんとす。望れ。樋口今井ゝ是を歩。叔を根井ゝ旌下ゝ属せん。下心ゝきれるなくやしく。清ゝ入ゝ木曾殿ゝ御前へ通しゝ。義仲其骨柄を見て。身ゝ丈六尺余ゝ眼環ゝ口巨ゝ色飽まく黒くく。鎌髭聽ゝ戌く節骨あまくさの荒そし。男なれど心中ゝ其胴貌を快しく紆を和ぐく仰ぐハ。久しく根井氏ゝ武名を聞しく。未ぶ見参せと頗る本意を失ひるれ。遽く入来あるべしハ。崖躍ゝ不堪。抑何度ゝ使く駕を促まゝやとあるれ。大弥太さくゝ一揖ぐるせどしく曰。我今日南域へきたりて別事なくど。頃日女童ゝ物絡れ。御辺ゝ勇力有と。我ゝ聞しく。眼前ゝ見ざれと信ずるゝ不足。さるゝ依く。我ゝ空言ゝ我拭さんくゝ。推参せんいざ我見前ゝ力ゝ程を見せ。れいへ。若見もるとて。解さんと是。怯弱ゝして名を惜者ありくいる。殘ゝ。ゝ。今井樋口海野なんどの諸勇士大ゝ怒ゝ色気立ちを。木曾殿ゝ早く図給しく。諸士を制。扱忠親ゝ向ひ静ゝ仰ぐを

根井を當國ゆく數代の住人代々武名を損ぜじ。別して御辺八人も行せ〻り取られた。如何なる難問ぞやとおもひ〻〻取安の問条なり。去なら勇ましき五の品あり。夫深山函谷に八猪狼を暴ゆ。猛獸を撃く恐きざるハ猟人の勇なり。海底に入波濤をくぐり〻〻蛟竜を切。鯨鯨を刺ハ漁者の勇なり。高木に攀登り危峯に翹四望し〻顔色変せざる脚慄きざるハ樵夫番匠の勇なり。捕て〻ハ必ず刺視て〻ハ必ず殺し〻悩ざるハ典刑の勇なり。百万騎を進退をること手足の如く縲を方寸に定め降を宥し背を伐百度戦ひて百度勝ハ霸者の勇なり。五勇各等し〻ず。不知御辺ら望む勇ハ何の勇ぞやと。弁舌流水のごとく半句もよどまずと曰へば。我慢の根井ら差緒り。一言も答ること能ハざる。全身汗を流し赤面し〻く在るを忽ち逸ゆ推下り。低頭平身して曰。城の某匹夫の勇を出ゆ慢じ。君子の大勇を志ざず。猥ゆ厳威を犯ひ〻こと恥し〻さよ。君ゲ大勇至剛凡庸の窺ふ所ゆあらず。願ハくハ自今以後某を御旗下ゆ加へ給ひ自然思召こと〻ひ〻ば。御馬の轡ゲ〻を〻り大馬の労を盡し〻ひ〻と真実皈伏の色を顕し〻ゆるゆそ木曽殿歓悦浅からざる。実に玉ハ當く砕ら玻璃ごとハ御辺の如き人も萬辛ハ得安く一抱ハ霧ごとし。古人も萬辛ハ得安く一抱ハ霧ごとし。以後ハ水魚の交りを結びたんと〻く。其ゆり大安を閑ゆ木曽殿忠親と主従契約の盃を取ハ〻ひ。丈より緒士一同ゆ盃を〻ひ昆〻く君臣和楽の酒宴ゆ列士酔を盡し〻り。数酒藍終りて根井ハ御暇願ハり。家城ゆ帰りて夜の行親ゆ縋し〻。木曽どの寛仁大度を語り。謹下ゆ属せ〻旨を明し〻く皈降を勧められて行親も平家の暴虐を悪む心あるゆ故承引し。二男六郎と幸連く木曽へ到り。大将ゆ拝縋し〻く御下ゆ属し〻ぬ。是ゆ因て根井が家門の根津望月を初し〻く悉く没落の憂きゆ木曽殿ゆ馳ゆ従ハ程ゆ追そり勢ひを得ゆひ〻り。都ゆハ平家の一門昼夜詩歌吹弾ゆ耽り。酒燕淫楽ゆ荒ミ上下ともゆ恭平無欲を唱へ弓箭兵学ゆ志ゆ無き東国北國ゆ

天下を呑んとする竜有り已に飛躍の気を顕わすとは夢にも思わざる時なり

危ひ多し

木曾義仲勲功圖會前篇巻之三畢